



千里眼、格闘技観戦記

少年時代というか地方のがき時代

1 1970年(S45)5月24日

日本プロレス 第12回ワールド大リーグ戦 長野スケートセンター大会

G馬場対ネルソン・ロイヤル

A猪木 ドン・レオ・ジョナサン

坂口征二 対 ターザン・タイラー

山本小鉄 ポール・ジョーンズ

千里眼の出身は長野県長野市。自称かわいらしい小学生時代に白黒テレビでプロレスと怪獣に出会い大きく人生が変わったわけ。まあ、当時の男の子はほとんどそんなもんだったけどね。

で、初の生観戦が当時何度めかのブームだった日本プロレス。期待の新星、坂口征二が前年のワールドリーグで日本デビュー。猪木も同リーグ戦に悲願の初優勝で、馬場の単独エース時代から3にんスター制に移行した時代。外人ではドリーファンクジュニア、ミル・マスカラス、そして団体は違うがビル・ロビンソンが前後して日本マットに登場してプロレス自体が新時代に突入しだしたころ。

坂口征二って今や人気の憲二くんのおやじさん。そのおやじさん自体が若手スター選手だった時代の話とは、とんだ昔話だね。

試合内容はほとんど覚えちゃいないが、参加メンバーには上記の外人の他に馬場よりでかい怪物ザ・コンピクトがいた。とにかく怪物を見た、という記憶だけがこの初観戦で唯一残っているだけ。これじゃ観戦記になってないね。

まあコンピクトがどんなもんだったかといえば“覆面のポップ・サップ、実はとんだ一杯食わせ物”てな感じ。

そのコンピクトは当時の人気まんが「タイガーマスク」に実名で登場。現実と同時進行で、まんがの中ではタイガーとチェーンデスマッチを敢行。田舎の子どもにゃ現実とフィクションの境目がなくなった。今にして思えば代表作「四角いジャングル」そのほか現実とフィクションの同時進行というかごちゃまぜは梶原一騎大先生の得意技だったまでのこと。

ところで試合前の午後、丸光デパート（長野県の方々、覚えてますか！このデパート）で猪木のサイン会があり、千里眼は行けなかったがおやじの知人が猪木のサインをもらってきてくれた記憶あり。なんと猪木のブロマイドにサインがしてあったのはよしとして、猪木が右手に「まむしドリンク」なるものをもって微笑んでいたのには困惑した。

当時の資料なんか持ってる物好きな長野県人の方いらっしゃいませんか。



2 1976年(S51)8月28日

全日本プロレス 日大講堂大会

ジャンボ鶴田対ジャック・プリスコ (UN王座決定戦)

デストロイヤー対スーパー・デストロイヤー (覆面十番勝負最終戦)

ジャイアント馬場 ボボ・ブラジル

高千穂明久 テッド・デビナス

千里眼中学生の夏休み、初の東京でのビッグマッチ観戦がこれ。当時、親戚が目白に住んでいたのとそこに当時大学生の仲のいいおじがいたので実現！日大講堂っていうのは両国の回向院のあたりにあって今の両国国技館とはJRの線路を挟んで反対側の方向。当時、全日のビッグマッチ常打ち会場だった。

入口では当時スポンサーから観客に粗品が渡されており、千里眼は大塚食品の「ボンカレー、そのほかお菓子入りの袋」をゲット。

さて試合の方はといえば同行したおじが山の手線の中で「プロレスなんてショーだ」という禁句を千里眼に吐くのでややしらけモードでスタート。しかもウルフマンなどという八百長説を証明するためにいるような代物が登場し、いよいよぶち壊しな展開。

千里眼はおじが憤慨して帰るといい出すんじゃないかと気になって試合に身が入らない。馬場のセミファイナルもあんまり記憶なし。

ところが！おじが「この人は本物だ」と言い出したのが元世界王者ジャック・プリスコ。たしかに今ビデオで見ても鶴田とプリスコはアマレス流の攻防なんかもあり、実にストロングスタイルな試合展開。次第に興奮するおじを横目で見ながら千里眼はプリスコに感謝、であった。

帰宅後も家族はおじの態度を心配していたらしいが「結構よろこんでたよ」という千里眼のセリフに爆笑だった。

デストの十番勝負最終戦、実はスーパーが出てきた瞬間、偽者というよりは別物だったので千里眼のほうしがらけてしまい、あまり試合の記憶なし。まあ当然デストが四の字で勝つわけですが、千里眼は「ゴジラ対メカゴジラ」みたいなものを期待してたんだな。